

IATSS三十周年によせて

## 乞復活「コーヒーメーカー」

中条 潮 慶應義塾大学商学部教授

慶應義塾大学商学部教授。公共料金、交通を中心に公共問題を経済学の視点から研究。米“TIME”誌で“Deregulation Warrior”と紹介された規制改革論者。バーのオーナーにしてウインド・サーファーでもあり、スカイマーク航空の設立にも参加した異端の大学教授。



はじめてIATSSのお手伝いをしたのがいつ頃だったか、正確には覚えていない。まだ私は助手だったから、IATSSができて間もない時期だったと思う。

その頃、私は過疎交通の規制制度と補助政策の改革を論じていたのだが、縁あって地方交通の話をするよう頼まれてサロンにおもむいたのが、IATSSとの最初の出会だった。サロンにコーヒーメーカーが置いてあって、自由にコーヒーをお代わりできたのがとてもおしゃれだと感じた記憶がある。

それ以来、二十数年、日ごろ、「日本の規制改革は不十分」と檄を飛ばしている身ではあるが、IATSSの歴史をふり返りながら日本の規制改革を思い返してみれば、確かに世の中はずいぶん変わったと思う。

私が旧運輸省を出入禁止になったのは1989年のことであるが、そのきっかけとなったのは、公正取引委員会の研究会報告書で主張した「運輸分野の規制緩和」が、当時の運輸大臣の逆鱗に触れたことにある。

しかし、その報告書で主張したのは、単に、「もっと割引運賃を増やすべきだ」ということにすぎない。

今や、新規参入の航空会社が登場し、超割やバースデー割引など、運賃は当時の百倍も多様化した。現在の状況から見れば、「なんでそんな些細なこと？」と思われるかもしれないが、往復割引とスカイメートくらいしか割引が認められていなかった当時においては、これだけでもご法度だったのだ。

それ以来、「こんなこと言っても、世の中、変わらないのかなあ」と思いながら、毎日の戦いを続けてきたが、こうやってIATSSとの出会いを思い起こしながらふり返ってみれば、「けっこう変わってきたじゃない。少しは自分の行動も役に立ってきたのかも」と少々自画自賛の思いしきりである。

コーヒーお代わり自由のIATSSのサロンで最初に話した時主張した「過疎地域における自家用車の共同利用制度案」も、今ではいくつかの地域で実施され、地方の人々の足となりつつある。

IATSS三十周年を迎えて、活躍の場を与えていただいた学会に感謝するとともに、今後も、「怒らず、焦らず、あきらめず！」戦いを続けていこうとの気持ちを新たにす次第である。

そして、「怒らず、焦らず、あきらめず！」を実行するに、コーヒーのお代わりは必需品！三十周年を迎えて、古きよき時代のあのコーヒーメーカーを復活してほしいと願うのは私だけだろうか？